

瑜伽行派における「菩薩藏」と「声聞藏」

高橋 晃一

東京大学

大乘経典は「菩薩藏」(bodhisattvapiṭaka) と呼ばれることがあり、また「広大な教え」という意味で「方広」(vaipulya) とも呼ばれる。「方広」(vaipulya) は伝統的な経典分類法である十二分教中の方広部を指す単語でもあり、実際に菩薩藏を十二分教の方広部に位置づけることもある。この「方広」(vaipulya) は単語としては「広大さ」も意味しうる。『瑜伽師地論』『本地分』の『菩薩地』は、vaipulya という単語の二義性を巧みに利用し、大乘の教えである菩薩藏を十二分教の方広部に位置づける一方で、この菩薩藏が声聞乗の教えの枠組みである十二分教よりも広大であるという解釈を示す。つまり、仏説の伝統の中に大乘経典を収めながらも、声聞乗の伝統の枠組みに収まらない広大さが大乘にあることを示す。このような大乘に関する理解は、『瑜伽師地論』の全体にわたって散見されるほか、『菩薩地』と関係の深い『大乘莊嚴経論』に伝わり、さらにアサンガ(5世紀頃)の『阿毘達磨集論』や『摂大乘論』に受け継がれている。本発表では大乘経典に対する瑜伽行派の見解を「菩薩藏」と「声聞藏」の対比を中心に考察する。